

令和7年度 浜松医科大学

医学科：一般選抜 [後期日程]

小論文問題冊子

令和7年3月12日（水）実施

【注意事項】

1. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
2. 問題に不鮮明な箇所等印刷上のミスがあった場合には、試験監督者に申し出ること。
3. 解答用紙及び下書き用紙には、必ず受験番号を記入すること。
4. 下書き用紙は持ち帰らないこと。
5. 問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読み、以下の間に答えなさい。

医師であるマンフレッド・ヒョップナーは1934年にナチス政権下にあったドイツで生まれた。当時は優生学の全盛期であり、断種法などの国家政策が推進されていた時代であった。若い頃に陸上選手としても活動していたヒョップナーは1953年に東ドイツの名門カール・マルクス大学の医学部に進学し、スポーツ医学を学んだ。東京オリンピックが行われた1964年にヒョップナーは東ドイツ政権を担っていたドイツ社会主義統一党に入党し、東ドイツスポーツ医学研究所に勤務して、陸上競技連盟の専門医となった。性ホルモンの研究が盛んであった当時、男性ホルモンを人工的に合成した筋肉増強剤も開発されていた。これにいち早く注目したヒョップナーは、筋肉増強剤を用いて選手の成績を上げ、専門医となったわずか3年後に研究所の副所長に就任した。

社会主義国家であった東ドイツでは、経済的な困窮や秘密警察からの監視を逃れるために人口流出が続き、ベルリンの壁が築かれた。国民の不満や閉塞感を緩和するため、また、資本主義に対する社会主義の優位性を示すために、国際スポーツの分野で東ドイツが存在感を示すことは重要であった。ヒョップナーは筋肉増強剤の研究を推進し、1968年のメキシコシティオリンピックでは、筋肉増強剤を使用した女子砲丸投げの選手などの活躍により東ドイツは金メダル獲得数を大きく伸ばした。4年後のミュンヘンオリンピックにおいても東ドイツは金メダル獲得数を倍増させた。東ドイツ選手の未曾有の活躍は国民に誇りを与え、国内を沸き返らせた。

1974年に東ドイツ政府は国家計画14・25を立ち上げた。薬物を投与する選手の選定や新薬の研究開発、投与方法などを科学的に管理し、薬物によって競技エリートを育成するこの計画を、ヒョップナーが指揮した。3千人以上の科学者やトレーナーがこの計画に関与し、推定1万5千人の選手に薬物が投与された。1976年のモントリオールオリンピックでも東ドイツの金メダル獲得数は倍増し、ソ連に次ぐ第2位となった。

ヒョップナーは実験の早い段階から薬物投与によって起きる副作用を認識していたが、薬物投与の長期的な影響を考慮することはなかった。女性の、特に水泳選手において体毛の増加、変声、性欲障害といった副作用が生じていた。その一方でヒョップナーは副作用を選手に知らせず、薬物をビタミン剤、栄養剤と称して与えた。1989年にベルリンの壁が崩壊したのちに分子生物学者のウェルナー・フランケによって国家計画14・25が告発され、その後、副作用の実態が明らかにされてきた。女性選手の90%に深刻な健康被害が生じていた。副作用には、腎臓や肝臓の疾患、重い精神障害などがあった。長期の療養が必要な事例や、副腎の機能低下によってホルモンの生成・分泌に障害が生じ、ホルモンを補う薬の継続的な摂取と頻繁な検査が必要な事例、長年の筋肉増強剤の使用により男性化が進み、心と体の乖離が激しく性転換を余儀なくされた事例もあった。薬物を投与されたことを知った元選手の中には、誇りを奪われ、苦悩し、怒りや悲しみ、絶望を感じたものもいた。

2000年にヒョップナーは、故意に142人の女性の健康を害する行為を幫助した罪に問われ、起訴事実を認めた上で、「もし医療の素人が(国家計画14・25の)実権を握っていたら、選手たちは、もっとひどい健康被害に苦しんでいただろう。だから私は、ドーピングシステムが選手のプラスになったと確信している。」と述べた。

NHK「フランケンシュタインの誘惑」製作班『闇に魅入られた科学者たち 人体実験は何を生んだのか』NHK出版
より要約

問 不適切な医学研究が行われる背景にどのような要因があると想像されたか、ヒョップナーは許されるべきか、またそれを踏まえて、あなたはどのように、どのような医師・研究者になりたいか、800字以内で述べなさい。